

中央公民館「身近な地域の歴史講座 2023」

－呉海軍警備隊足摺探信所跡のフィールドワーク

先週 3 月 18 日(土)9 時～12 時の日程で市内に所在する戦争遺跡のフィールドワークを実施した。戦争遺跡は、足摺岬の通称「天狗山」の尾根筋に点在する呉海軍警備隊足摺探信所に関わる兵舎・本部指揮所・レーダー敷設コンクリート基礎等を現地学習した。

公民館職員等の関係者を含めて 23 名の参加者があった。市内はもとより市外から参加された方もおられた。9 時に公民館前で出発式を行った後、市のマイクロバスに乗り合わせて現地に向かった。朝まで小雨が降るよいコンディションとはいえない状況ではあったが、開始時刻には天候も回復し、青空も見られた。何よりも滑って転倒して怪我をした方も出ず、無事故で日程を終えたことがなによりだった。

講師は、『新土佐清水市史』において戦争遺跡を執筆担当の出原恵三氏。氏は、全国戦争遺跡保存ネットワーク共同代表で、平和資料館草の家副会長。戦争遺跡保存のエキスパートで全国的な指導者・研究者でもある。



↑ 海拔 266m 付近にある 11 号電探の基礎



↑ 海拔 190m にある本部指揮所への上り口

(1) 戦争の記憶は「ひと」から「もの」へ

太平洋戦争が終結して 78 年。戦争を実際に体験した方が少なくなり、戦争の悲惨さや恐怖を伝えることができなくなるなかで、その記憶が自然と風化されることを危惧する。そこで戦争の実相が刻まれている戦争遺跡が注目されるようになった。出原氏は、戦争遺跡を調査・保存することによって戦争を知らない世代に戦争の記憶のバトンを渡すことができるのではないかと語る。

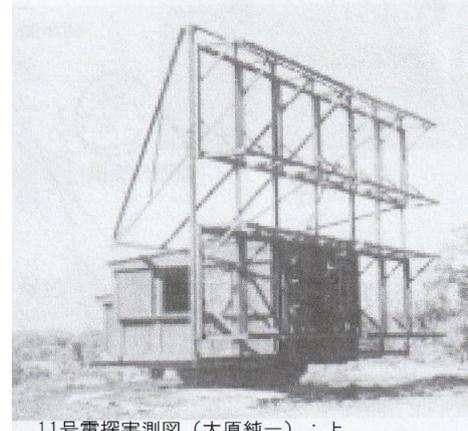
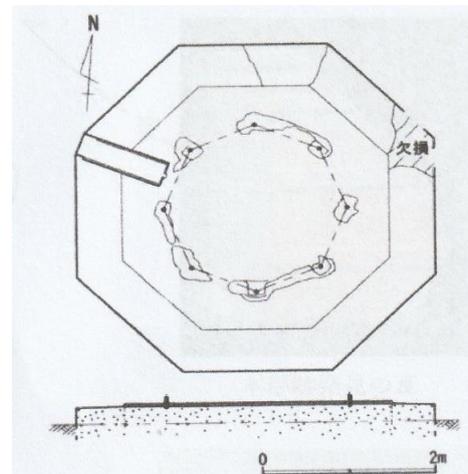
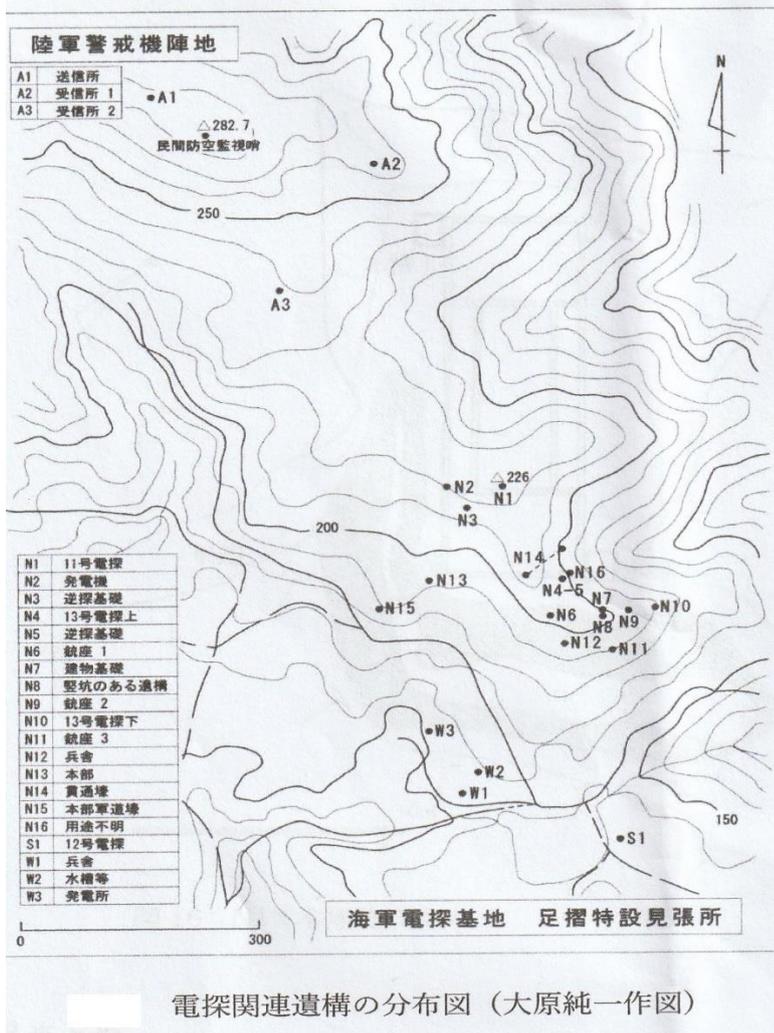
足摺半島は、四国最南端にあることから明治以降、軍事施設が数多くつくられてきた。しかし、その実態は必ずしも明らかではなく、不明な点が多くあった。今回の市史編さん事業に関わる戦争遺跡調査で建物基礎や横穴壕などが次々と姿をあらわし、その実態が次第にクリアになってきた。

(2) 足摺望楼跡

現在の足摺岬園地に置かれ、日露戦争後の明治34年(1901)に完成して翌年から使用された。現在ある展望台と同じ位置に海上の見張所である望楼が設けられた。周辺には事務所・発電所・電信室等が併設されていた。旧国民宿舎跡に建てられた観光案内所から展望台に延びる通路は当時の景観を留めている。所々に当時建物基礎に使われていた赤煉瓦の破片を散見することができる。望楼は正式には「海軍望楼」と呼ばれ、沖行く船を監視し、艦船との無線中継も行っていた。日露戦争に備えて日本列島各地につくられたが、日露戦争が終戦になるとほとんどが廃止されたが、足摺望楼は大正10年(1921)まで存続する。その後は、気象観測のための測候所として昭和5年(1930)まで使用され、再び海軍に返還された。

(3) 電探基地(レーダー基地)

足摺半島南端部の通称「天狗山」の尾根筋には、敵戦艦や航空機をいち早く発見するためのレーダー基地が置かれた。電探(レーダー)は、発出された電波が目標物にぶつかり、反射して帰ってくる波を受けて、その方向や距離を求める装置で、第二次世界大戦に初めて登場した。足摺半島のレーダーは、本土空襲のために飛来する米軍機を探知するため設けられたものである。天狗山尾根筋には、レーダーを置くための八角形のコンクリート基礎・地下式コンクリート構造物・レーダーの動力源となる発電機設備の基礎・大きな水槽・機銃陣地跡・本部指揮所跡の建物基礎・兵舎跡・軍道跡等が多く残存している。また、様々な種類のガイシや金具・瓦・カスガイ・機関銃の先端部などの遺物が発見されている。



11号電探実測図(大原純一)：上
と電探の写真：下